

清溪川 (チョンゲチョン) 再生

足立 龍枝



(復元された清溪川の出発点)

ソウルの中心部を流れる清溪川(チョンゲチョン)は、2005年に再生されてから歩く人の絶え間がない。初年度はマイナス10度の夜でも人の流れが続いていた。今も外国人観光客が多い。その清溪川の歴史と清流を取り戻したドラマを知りたいと常々思っていた。

今年3月、大阪中崎町の韓国文化院で清溪川の写真・図面展示会と再生研究者として関わってきた現法政大学の建築・環境研究者の朴賛弼(パク・チャンピル)さんの講演を聞く機会があった。

620年前に作られた都市ソウル(当時は漢陽ハニョン)は、南に漢江、その支流として清溪川が漢江とは逆方向に流れている。「清溪」という名前は植民地時代につけられたのだが、清らかな流れだったことは想像できる。

ところが、20世紀になってソウルに人口が集中するとともに清溪川は汚染と氾濫に悩まされる。1937年ごろには浚渫が必要になっていた。植民地時代に京城師範学校に通学していた友だちのお父さんの話では、すでにそのころ、清溪川の汚染は問題になっていたようだ。宮殿(当時は朝鮮総督府)の前から国王が使用した橋といわれる「広通橋(クワンドンギョ)」までの川に蓋をする覆蓋工事が完成したのは1942年。いまの清溪川の最西端にあたる部分だが、川に蓋をする工事はこのころから始まっていたわけだ。

その後も人口は増え続け、1950年代には朝鮮戦争の避難民も集まり、川の両側には無許可のバラックの集落ができていった。川の氾濫から守るため、高床式のバラックである。羽子板(ハコバン)と言ったり、板子家(パンジャチップ)と言ったりする。

1960年代に入って本格的に覆蓋工事が始まり「覆蓋の時代」といわれるほどになっていった。清溪川の上には、1958年から1967年までかけて、延長6キロ、幅50メートルの覆蓋道路が完成した。さらにその上に高架道路まで作る計画が進められた。ちょうど日本は東京オリンピックの直前。首都高速道路が作られていた時代で、韓国にとって、高架道路を作る工事は、日本がよい見本だった。

結局、高架道路工事は1967年から1976年までかかって完成。朴政権下の「漢江(ハンガン)の奇跡」といわれた時代で、韓国の成長期だった。しかし、高速道路は都市の中に入ってきてはいけない建設だとの投書がきっかけで、計画案が縮小されたという。また、高架道路の有料化計画も取りやめになった。

同じころ、地方でもよく似たことが行われていた。済州島に行くと、市内に山地川(サンチネ)が流れている。済州島は火山島なので川が少ない。山地川は、飲み水・洗濯・沐浴など生活用水として利用されていたが、1960年ごろからは上水道の設備が整い、川が必要でなくなった。それと同時に人口が増え続け、人々は街へ街へとあふれ出してきた。そこで考え出されたのが、600メートルの川に蓋をして利用することだった。ソウルとは違って、覆った上には商店つき3、4階住宅が建てられた。港に近く、東門市場という大市場にも近かったので、港と市場とを結ぶ通りとして発展していった。

しかし、街に潤いを取り戻そうという運動が進み、2002年に覆蓋を取り除き、川の流れを取り戻している。



(済州市東門市場)



(復元された山地川の洗濯場)

のちに大統領になった李明博氏が自然のある都市河川を選挙の公約にしてソウル市長に当選。反対もあつたが、公約どおり進んでいった。済州島タクシー・文仁珠さんの話によると、山地川の橋の方を指差

して「あそこから、李明博大統領はソウル市長になる前に復元した山地川を見ていました」と教えてくれた。いったん蓋をした川を復元する事業の先例として見学に来ていたということだった。

そして、1980年代になり、マスコミで取り上げられ、指摘されたのは、暗渠の中を流れる下水から発生するメタンガスの爆発の危険性である。アメリカ軍は爆発を予想し、その高架道路は使用していなかったそうだ。

また、道路工事が行われた時期は、鉄筋もコンクリートも国内ではまだ生産しておらず、安い輸入品に頼っていたので、両方とも老朽化がひどかった。車の数も増えすぎ、道路が堪えられなくなり、修理には膨大なお金がかかるということになって、考え出されたのが全面撤去であった。

2003年から始まった撤去工事・復元工事にはいくつか問題があった。このころ、あのあたりは、何度も行ったり来たりしていたので、工事に関心があった。

交通量の超多いところなので、いちばん影響を受けるのは交通問題だった。○高架道路の通行禁止 ○迂回路を作る ○商人と露天商のために駐車場との間に無料シャトルバスを走らせるという規則を作った。

1年目はうまくいかなかったが、あとはトラブルもなく、工事中も2車線で車は走っていた。覆蓋をはずしたときの悪臭は確かに鼻をついたが、予想したよりはゆるい臭いだったように思う。川沿いのバラックに住んでいた人たちは優先されアパートに移住した。少し先輩の済州島の例から学んだようだ。

商人と露天商との問題として、工具・照明器具商人たちは、反対の立場を取ったので、建物は撤去しないという条件で決着をつけた。

1,000以上ある露天商は、不法な商いであっても、生きる権利があるというところで話し合いを繰り返し、東大門運動場が提供された。李明博氏がアルバイトをしながら生活したところに近い。理解が早かったようだ。

他にも問題はあったが、2年3か月という超スピードで、復元再生が完成したのは、2005年10月1日だった。全長6キロのウォーキングコースに変身した。完成記念にウォーキング大会が行われたが、都合がつかず、参加できなかったことがいつまでも悔やまれる。とびとびになるが、私は半分ぐらいはすでに歩いているように思う。

川沿いを歩くのも楽しいが、22の橋を渡るのも味がある。

朝鮮時代のいわれのある橋が広通橋と水標橋(スピョギョ)。広通橋は、暗渠の中で無事だった。水標橋は蓋をするときに樊忠壇公園に移転していて、今もその場所にある。朝鮮時代はその二つの橋の上で楽しい行事が行われていた。李氏朝鮮時代500年の韓流ドラマ時代の話だ。



(全泰壹青年像)



全体の間あたりに「柳橋(ポドウルタリ)」という橋がかかっている。橋の南側にある平和市場の中の縫製工場では、劣悪な労働条件で多くの若者が働いていた。改善のための活動をしていた全泰壹(チョン・テイル)青年は、改善されない活動に力尽きて、焼身自殺をした。彼の上半身像がアルミで作られている。

35年ぐらい前、全泰壹を取り上げた演劇を大阪でも上演された。オモニの力強い言葉が印象に残っている。御堂会館だったと懐かしく思い出す。

(歴史と環境都市への挑戦「清溪川写真・図面展覧会」より)



1960年ごろ



1980年ごろ



現在

ほとんどの人は行かないが、6キロの最終地点には、清溪川文化館があり、企画展など値打ちものだ。文化館の向かい側には、高床式のバラックが5軒ぐらい保存されている。



(清溪川文化館の前に保存されているバラック)



工事中は「京都の鴨川のように」という合言葉があった。ソウルの知り合いと京都へ行ったことがある。四条通を歩き、四条河原町から鴨川べりへ出た。「ここが鴨川ですよ」と説明すると、すかさず「この川の水はどこから来ているのですか」と、質問。北のほうを指差して「山がいっぱいあるから、そこから流れてくる水が集まっているのです」……清溪川の水は支流からの流れもあるが、植民地時代に電車を走らせるために、ほとんどの支流は蓋をしてしまった。



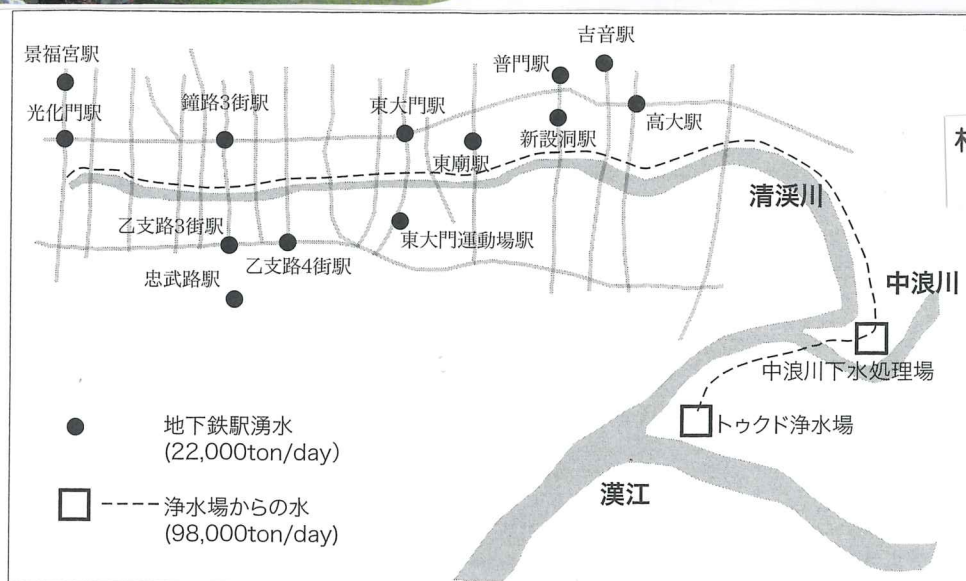
では、どのようにして水を確保しているのか。①漢江の下流に位置するトゥクト浄水場で浄水し、きれいな水を清溪川上流までポンプで上げる方法 ②非常の場合は、中浪川という支流の下水処理場で補う ③、①と②で、必要な水量が6分の1足りない。清溪川周辺の地下鉄駅に湧き出ている湧水を集める……このようにして水深40センチの水が確保された。

要するに機械で環流しているのだ。それにかかる莫大な費用は、どこから支出しているのだろう。ソウル市民の負担はどの程度なのか。詳しく調べていないし、このあいだの講演会やまとめた本の中には出てこない。質問もしそびれてしまった。調べたいと思っている。

川の再生という点で清溪川は、世界に自慢できるといえるようだ。ソウル600年の歴史を知り、ゆっくりと自分のペースに合った探訪をされたいかがでしょうか。

←(奨忠壇公園に保存されている水標橋)

韓国ドラマ「野人時代」の中に、鐘路の朝鮮人ヤクザが本町の日本人ヤクザのところへ対決に向かうときの「水標橋に集まって…」という台詞が耳に残っている。たまり場になっていた映画館「優美館」も近い。



清溪川再生のための用水供給図

朴賛弼著

「ソウル清溪川再生」より